

多様性から得られる学び

－日本社会関係学会第3回研究大会開催にあたって－

千葉大学 予防医学センター 社会予防医学研究部門 教授
国立長寿医療研究センター 研究所 老年学・社会科学研究センター 老年学評価研究部長
近藤克則

日本社会関係学会第3回研究大会を千葉大学で開催できることを大変うれしく思います。学会にも大きく2タイプあります。同じ学術分野の研究者が集まるタイプと、共通テーマの元に多様な異なる分野や立場の人が集まるタイプです。本学会は、明らかに後者です。例えば大会運営委員長の専門をみると、第1回の稲葉陽二先生は経済学、第2回の佐藤嘉倫先生は社会学、そして第3回の私は予防医学センターと老年学・社会科学研究センターの両方に籍を置いています。

このタイプの学会には、同じ分野の研究者だけが集まるタイプの学会にはない魅力があります。1つ目は他分野の研究者からの学びです。今回のメインシンポジウムには、澤田康幸（経済学）、原田謙（社会学）に加えて小林正弥（政治哲学）、内田由紀子（心理学）、白井こころ（健康科学）という各分野を代表する先生方にご登壇いただきます。異なる学術分野が成り立つには、他分野とは異なる概念・枠組みや理論（仮説）や方法が必要です。「社会関係と well-being（幸福・健康）」という共通テーマを、それぞれの学術分野がどのように捉え、アプローチし、何を明らかにしてきたのかを論じていただきます。他分野の研究から、自らが無意識に前提としていたものとは異なる概念・枠組み、理論（仮説）や方法から得られた知見などを学べば、視野が広がり、新たな認識や着想が得られるはずです。

もう一つの魅力は、研究者だけでなく、社会関係に着目して、コミュニティや市民社会づくりに関わるNPO、市民や行政職の人たちなど実践・政策現場の人たちも参加して相互に学べることです。研究者は客観的な観察や普遍性を重視しがちで、研究の多くは観察研究に留まります。一方、現場では、期待した変化を起こすことを目指しています。介入すると、予期したことも、しなかったことも、光の面も影の面も生じることを、経験しています。「プリンの味は食べてみないとわからない」ので、現場報告から研究者が学べることもあるはずです。逆に実践家は、自分が経験していない、より普遍的な現象やメカニズムなどに関する知見を研究から得られます。こうして実践・政策現場の人も研究者もそれぞれに、自分の持っている知見の補強や相対化ができるはずです。

本研究大会を通じて、異なる立場の人たちが、それぞれに、多くの発見や学びを得ることを願っています。